

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00165

研究課題名（和文）新たな視点による東日本の中世近世地方仏に関する研究

研究課題名（英文）Research on medieval and early modern regional Buddhism in eastern Japan from a new perspective

研究代表者

須藤 弘敏（Sudo, Hirotochi）

弘前大学・人文社会科学部・客員研究員

研究者番号：70124592

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：北東北における宗教彫刻の展開について次の2点について明らかにした。一つは、非仏師による造像「民間仏」の作例を大規模に調査し、その様相と特質を把握した。特に木工に関わる職人や大工などが制作した彫像の、個性的で造形性にあふれる表現の魅力を具体的に把握した。もう一点は、宗教彫像が全国で均質化して個性的な表現を忌避していた近世の状況に対し、異例の展開を見せている北東北の民間仏の重要性を明らかにしたことである。造形に祈りを率直に表す地方仏の本質を失いかけていた近世に、北東北では村の生活の中にその性格を継承する仏像神像が制作され続けていたことを具体的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本彫刻史や近世美術史において、その存在や価値を知られることがなかった地方の民間仏の重要性と魅力を初めて明らかにした。また、その原点となる中世以前の地方仏から継承された要素と地域性の特色も明らかにした。

何より本研究の成果を「みちのく いとしい仏たち」という展覧会の形で社会に直接伝えた点は特筆に値する。研究成果をわかりやすく親しみやすく具体的に公開した本展覧会は、盛岡、京都、東京の3会場で81,000人余の観覧者を得、研究成果「暮らしに寄りそう仏たち」を収載した図録は14,000部以上頒布された。これは本研究の意図と成果が広く社会に受け入れられ共感と呼んだことを証していよう。

研究成果の概要（英文）：The following two points were clarified regarding the development of religious sculpture in northern Tohoku. First, I conducted a large-scale survey of examples of folk statues created by amateur craftsmen to understand their aspects and characteristics. In particular, we specifically grasped the appeal of the unique and sculptural expressions of statues created by craftsmen and carpenters involved in woodworking. Another point is that it reveals the importance of folk Buddhism in northern Tohoku, which is showing an unusual development in the early modern period, when religious statues were homogenized across the country and avoided individual expression. It has been concretely revealed that in the early modern period, when the essence of local Buddhism, which openly expresses prayer in its forms, was on the verge of being lost, in northern Tohoku, Buddhist statues and divine statues that inherited this character were continued to be created in village life.

研究分野：美術史

キーワード：地方仏 民間仏 東北 信仰

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

北東北を中心とした地方仏の調査研究は近年は事例自体が乏しく、ことに近世の作例を対象とする調査研究は代表者の先の研究(2015年から18年度)が唯一であった。

2. 研究の目的

先の研究を踏まえ、新たに近世地方民間仏を中心として、広く東日本全体も視野に入れて、その個性的表現の淵源と展開の様相を明らかにする。

3. 研究の方法

地方仏について、代表者は北東北を中心に調査を行い情報の充実につとめ、分担者は各々の地域を中心に調査と情報の拡充につとめる。期間中に合同の調査と検討会を持ち、それぞれの得た知見や判断を共有する。調査結果のデータベース化とさらに展覧会という形で情報公開を企図する。

4. 研究成果

(1) 社会状況変化による現存仏像の再点検

本研究計画は当初調査範囲を南東北や関東甲信に広げて対照研究を行う予定だったが、研究期間とコロナ禍が完全に重なってしまい、当初計画の変更を余儀なくされた。研究分担者や協力者との合同調査もそれぞれの所属機関の自粛方針があり、離れた地域にまたがる調査を阻む状況が出来た。そのため、あえて既調査地域の再精査という方針に転換した。具体的には各自治体等の調査報告書に限らず、広く自治体史や地方史の記述の中に取りあげられている中世以後の仏像神像の情報をさらに収集した。その結果、過去に十分な調査報告がなかったり存在の確認さえされていない作例を30件以上見いだした。その中から、これまでの調査が見落としがちだった神社に伝来する仏像神像と近世の民間仏を対象を絞り、その重要性がうかがえる作例を順次調査していった。地域は限定したものの情報が得にくいことも承知していたため、伝聞や紀行文にまで探索の範囲を広げていったことが結果として予想外の発見にもつながった。

(2) 多くの現地調査と比較研究

如上の事情により研究期間を4年間に延長した上で、現地調査の回数と内容を充実させた。北東北3県の寺院、神社、個人宅、資料館などでの地方作彫刻調査は代表者担当分だけで総計47回を数えた。新規の調査だけでなく、過去に自身が調査した箇所でも再度作例

の発見や確認に十分な時間をかけ、情報の充実を心がけた。また 1960 年から 80 年にかけての調査記録が残る岩手県内の彫像の詳細な再調査では、地方仏全体の意義を再考させるいくつかの知見が得られ、本研究の主目的にかなうものだった。

また当該期間に全国各地の地方仏関連書籍や図録の収集に努めたほか、横浜市歴史博物館「横浜の仏像」展、福島県立博物館「藁の文化」展、長野市立博物館「信州ゆかりの作仏聖」展、上越市立歴史博物館「上越のみほとけ」を観覧する機会を得た。ことに長野の仏像展は仏師によらない造像の作例で本研究に裨益するところが大きかった。

(3) 神社等伝来諸像の再認識

地方仏の新たな調査で得た大きな収穫は、神社あるいは神仏分離以前に神社等の別当家だった個人宅に残された仏像神像である。こうした所蔵先については、所蔵情報が公にならないこともあって、自治体ごとの仏像調査などにおいても見過ごされてきたケースが多数ある。代表者自身も長年青森県下ほぼすべての寺院の調査を行ったが、神社や修験系別当宅の調査機会は乏しかった。今回の研究期間内に新たに青森県内の 4 箇所、岩手県内の 4 箇所、秋田県内の 1 箇所の調査を行い、それらに伝来するすぐれた地方仏らを確認することを得た。その中で青森県南部町の斗賀霊現堂伝来諸像は平安時代から鎌倉時代にかけて多数の仏像、神像、面が含まれていて、内容表現ともに地方的な特色がよくうかがえる貴重な作例であった。斗賀の諸像は旧糠部地方各所に所在する毘沙門天像、不動明王像と強い関係が推測され、岩手県一戸町毘沙門堂像や青森県田子町真清田神社像がその好例である。中世から近世にかけて北東北における明確な信仰と造像の明確な系譜が確認された。またきわめて個性的な江戸時代の神像と仏像を青森県津軽地方の複数の神社で見いだしたが、これは地方仏、民間仏の理解にきわめて重要な役割を果たす存在である。明治以後初めて調査記録された点でも貴重な作例である。

(4) 神社等伝来諸像の意義

地方においては、仏像を寺院や仏教という文脈でのみ考察することがいかに無意味かと言うことを神社等伝来の諸像を調査して今さらながら強く認識した。教団の規定する尊像の種別や規格は寺院本堂の本尊像を縛るものであっても、それ以外の場に儀礼と関わりない形で祀られる像には一応の基準でしかない。礼拝対象としての要件は具備していても、それをどういう形に表すか、喜怒哀楽のこもった祈る心情に則した表現は率直で力強い。空間荘厳や権威の象徴、儀礼の道具といった、通常仏像が担わされている機能と無縁になったとき、宗教造形はどういう方向を向くのか、それを北東北の近世民間仏は明快に語っている。日本の宗教造形が一定の形式と表現の枠の中で展開したという理解に変更を迫る彫刻群は日本美術史そのものに新たな記述を要請するほどの意義を持つ。その中で象徴的な

作例である岩手県葛巻町宝積寺の六観音立像については、分担者協力者あわせて5名で詳しい調査と検討会を開催し、中央の観音像と隔絶したかの観がある、技巧表現ともにきわめて個性的な彫刻の価値を認識した。

(5) 調査研究成果「みちのく いとしい仏たち」展の開催と大きな反響

研究の計画時点で構想していた、北東北の民間仏とその祖型である古代中世の地方仏を集めた展覧会が研究2年目に具体化し、新たな調査も加えて最終年度の2023年4月から24年2月にかけて、岩手県立美術館、龍谷大学 龍谷ミュージアム、東京ステーションギャラリーの3会場で「みちのく いとしい仏たち」展(主催者 上記3館およびNHKプロモーション、監修者須藤)として開催されるに至った。青森、岩手、秋田3県の仏像と神像134軀を陳列し、同展の図録には代表者須藤による総論「暮らしに寄りそう仏たち」と作品解説、ほかに分担者矢島による「民間仏の発見」も収載された。科学研究費助成を受けた美術史の研究が展覧会に結実する例は珍しくはないが、本展のように学術的にも社会的にもほぼ未知のテーマが大規模展として実現したのは画期的で、全国3箇所での開催も特筆されよう。結果として8万人を超える来場者と1万4千部を超える図録の売り上げはこのテーマが社会に広く認知され、多くの共感を得たことを語る。一般の関心を集めただけでなく、所蔵者の方々がそれぞれの像が有する高い価値を認識されたことは研究の社会的な意義として評価されよう。

(6) 研究の位置づけと今後の展望

これまで他地域にその情報が知られることが少なかった北東北の信仰と造形の深い関わりについて、具体的な作例でその展開を明らかにした。単なる地方仏展開の一事例なのではなく、むしろ信仰に支えられた地方仏が近世にまで生まれ続けていた北東北の重要性を指摘できたことは大きな成果で、日本彫刻史に新たな視野と価値観を要求するものである。一方、そうした分野を確認したことにより、近世地方仏が胚胎する種々の問題を真剣に考えていく必要がある。たとえば、なぜ菩薩像に合掌像が圧倒的に多いのか、民俗学が注目するオコナイサマや古くからの拱手する女神像、さまざまな要因があり、実際に祀られた民家ではどう意識されていたのか、関連諸学との意見交換が必要である。ほかにも岩手県旧東山町周辺の聖徳太子信仰とその独特な造形、岩手青森両県に広がる毘沙門天ネットワーク、あり得ないほど多様な十王像の表現なども課題である。何よりも宗教造形の均質化と平準化を拒む北東北の性格の解明が必要であろう。

また文化財保護の観点からは、8年間に及んだ調査の結果民家や古祠から見いだされた仏像神像などを今後どう守っていくのか、所蔵者だけでは果たし得ない現状を自治体や研究機関と協力して進めていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 須藤弘敏	4. 巻 474
2. 論文標題 みちのくの民間仏はなぜ「かわいい」のか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 美術の窓	6. 最初と最後の頁 48 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 須藤弘敏	4. 発行年 2023年
2. 出版社 NHKプロモーション	5. 総ページ数 178
3. 書名 みちのく いとしい仏たち展図録	

1. 著者名 矢島 新	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 296
3. 書名 日本美術の核心	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	矢島 新 (Yajima Arata) (00565921)	跡見学園女子大学・文学部・教授 (32401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	近藤 暁子 (Kondo Akiko) (80574152)	山梨県立博物館・山梨県立博物館・学芸員 (83503)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	塚本 麻衣子 (Tsukamoto Maiko)	福島県立博物館・学芸員	
研究協力者	西川 真理子 (Nishikawa Mariko)	埼玉県立歴史と民俗の博物館・学芸員	
研究協力者	佐々木 あすか (Sasaki Asuka)	弘前大学・人文社会科学部・助教	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関